

## 論語の新解釈 (1)

### 「鮮仁矣」をめぐって

山崎 徹

#### 1.

論語には「すくなし」と訓ずる字は「鮮」「希」「寡」の三字がある。しかし、この三字に意味上の差異をつけて解釈したものはない。何晏の「論語集解」、邢昺の「論語正義」また朱子の「四書集注」にしても、「鮮は少なり」と解釈しているし、我国の吉川幸次郎、吉田賢抗、金谷治、貝塚茂樹ら、諸研究者の解釈も「少ない」「ほとんど無い」「乏しい」というものであり、あまり差異は見られない。確かにそれでも意味は通じるわけであるし、矛盾無く解釈できている。しかし、だからといって、この三種の文字が、まったく同じだと断定して良いであろうか。それぞれの文字の意味に注目して、新たな解釈を試みたい。

特に、論語の名句として知られている「巧言令色、鮮仁矣」について、新たな解釈を試みる。

2.

論語で「少なし」と訓ずるものなかで、「鮮」が使われているのは、

有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者、鮮矣。(学而篇)

子曰、巧言令色、鮮仁矣。(学而篇、陽貨篇)

子曰、以約失之者、鮮矣。(里仁篇)

子曰、中庸之爲徳也、其至矣乎、民鮮久矣。(雍也篇)

子曰、知徳者鮮矣。(衛靈公篇)

の六ヶ所である。

「希」が使われているのは、

子曰、伯夷叔齊、不念舊惡、怨是用希。(公治長編)

孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出、天下無道、則禮樂征伐自諸侯出、自諸侯出、蓋十世希不失矣、自

大夫出、五世希不失矣、陪臣執國命、三世希不失矣。(季氏篇)

の二ヶ所。

「寡」は、

子張學干祿、子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤、多見闕殆、慎行其餘、則寡悔、言寡尤行寡悔、祿在其中

矣。(爲政篇)

に見えるのみである。

「鮮」「希」「寡」の本来の意味を考えてみる。

「鮮」は「説文」によれば、

鮮、鮮也、出貉國、从魚彡省聲。

とあり、魚の名にはかならない。また「説文通訓定聲」には、

鮮、假借爲鱻。

とあり、なまうおの意であることは明らかである。これを「少ない」の意とするのは、「少」という字の仮借である。

「希」は「説文」の本文にはないので、逸字として、多くの研究者が補っている。「説文通訓定聲」によると、希、假借爲稀。

とあり、「稀」は「説文」によると、

稀、疏也、从禾希聲。

となっていて、稲がまばらという意であり、従って「希」も「まばら」の意と解釈できる。

「寡」は「説文」によれば、

寡、少也、从宀頌、頌、分也、宀分故爲少也。

とあり、貯蔵物を分与するというのが、本来の意味である。つまり、本義は、減少して少なくなっているという意である。

まとめて簡単にいうと、「鮮」は、新鮮で、まだ、出はじめてであるが故に少ないものであり、「希」は、全体からみると、まばらだから少ないのであり、「寡」は、他に分与したが故に少ないのだと考えてよい。

これらの意味を踏まえたうえで、論語の本文を見てみると、「希」についていえば、多少の少であり、いわゆる「少ない」の意で、何の問題も無いし、「寡」については、まさに、余分なものを取り除いて少なくするという、本来の意味と合致しており、この字が使われている理由も納得できるのである。この二字の例から見ても、各々が、一定の傾向によって使われているのは明らかである。ということは「鮮」についても同様と考えるべきであろう。

「鮮」の使用例を見ても、

鮮不五稔。左氏伝 昭公

鮮克有終。詩経 大雅

など、ただ「少ない」のではなくて、出はじめであるが故に「少ない」の意に取れる。

論語についても「鮮」が持っている本来の意味を深く勘案すべきであり、ただ「少ない」という単純な解釈だけでは、意を尽くしていないと思われる。そこで、

巧言令色、鮮仁矣。

について考えてみる。

この語句は、学而、陽貨の二篇に、まったく同一の文で載せられており、これは、論語の編集の一貫性の無さのあらわれとも言われているが、それ程に重要な意味を持っているとも考えられる。しかし、諸研究者の訳を見ると、

「ことば上手の顔よしでは、ほとんど無いものだよ、仁の徳は」金谷浩、論語<sup>(1)</sup>

「巧妙な飾り過ぎた言葉、たくみな顔色、という事柄、乃至は、そういう事柄をもつ人物の中には、仁、真実の愛情、の要素は少ない」吉川幸次郎、論語<sup>(2)</sup>

「弁舌さわやかに表情たつぷり。そんな人たちに、いかにほんとうの人間の乏しいことだろう」 貝塚茂樹、

論語<sup>(3)</sup>

「口先がうまくて、顔つきを飾る人には、めったに真実心は存しないものだなあ」 吉田賢抗、 論語<sup>(4)</sup>

「口先たくみに顔つき柔らかげに人には、うわべを飾ってできるだけ人を喜ばせようとすれば、慾が先に立つて、生まれもった徳を失ってしまうようなことが起こる。だからそういう人には、めったに、実は絶対に、ありませんよ仁は」 倉石武四郎、 論語<sup>(5)</sup>

となっており、単に多少を言っていたり、絶対に無いと言い切ってもものさえある。

しかし、論語の、しかも学而篇にあることを、もう少し深く考えてみるべきであろう。論語は、孔子の弟子、孫弟子たちの手によって編集されたもので、各篇ごとに何らかのテーマを持っているはずである。学而篇は、論語の最初の篇であり、このテーマは、学問の喜びを通じて、学問のすすめを果たそうというものである<sup>(6)</sup>。つまり、当時、孔子の学塾に弟子として入門してきた少年たちに対して、学問の楽しさを伝える言葉や、学問を身につけるための心構えを示したものと考えられる。また、学問というと、現代の常識では、書物を研究することを主とするのだが、当時の学問の中心は、礼の体得であり、君子としてふさわしい礼儀作法を身につけることが第一としていたのである<sup>(7)</sup>。つまり、学而篇は、これから学問を始めようという少年たちに対して、理想の人間関係としての「仁」、親子関係としての「孝」、長幼関係としての「弟」、その他、君臣、夫婦、朋友とあるべきかたちや、君子としての日常の心構えを説いたものと考えられる。その中で、特に親子の関係については、

子曰、弟子入則孝、出則弟、護而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

子曰、父在觀其志、父没觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。

というように続いて出てくるところを見ても、この「巧言令色、鮮仁矣」も、ただ一般論として述べていると考えてはいけけないので、孝を述べている延長にあると考えなければならぬのではなからうか。一語一句ずつの解釈をしてみよう。

まず「巧言」であるが、「巧」は「巧妙な」「飾りの多い」で良いであろう、従って「巧言」は、うまい言葉、お世辞と考えてよい。「令」は「良き」の意であり、「令色」は、良い表情、媚びた表情と考えてよい。「巧言令色」は、当然、人の嫌うものである。しかし、そこに真実がまったく欠けていると考えるなら「鮮」ではなく「無」となるはずである。事実、論語には「無し」と断定しているものが多い。

子曰、君子食無求飽、居無求安。(学而篇)

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。(爲政篇)

子曰、苟志於仁矣、無惡也。(里仁篇)

などがそれで、「巧言令色」にも多少の「仁」があるから「巧言令色、無仁矣」とはならないであろう、また「希仁矣」でも「寡仁矣」でもなく、「鮮仁矣」としているのには、それなりの意味があるはずである。

「巧言令色」の語句は、論語に、もう一ヶ所あり、「巧言」の句のみなら、更にもう一ヶ所出ている。

公冶長篇に、

子曰、巧言令色足恭、左丘恥之、丘亦恥之、匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥之。

とあるのがそれである。この語句を解釈すると、孔子は「巧言令色」を恥じているということである。<sup>(8)</sup>「恥」は反省しているということであろう。「恥」は反省ではなくて、反撥を意味するとの解釈もあるが、<sup>(9)</sup>素直に読めば、孔子は、かつて、このようなこと、つまり「巧言令色」をしたことがあり、今、これを反省していると

いうことになるであろう。ということとは、「巧言令色」は、孔子ほどの人物でも、思わずやってしまったことがあるようなことと考えてよい。孔子が、このような不道德なことを忌み嫌っていたという解釈は、「巧言令色、鮮仁矣」との、解釈の整合性を保つための、やや強引なところがあり、不自然さを免れない。孔子が若いころ、思わずやってしまった「巧言令色」についての反省ならば、決して好ましいこととは言えないにしても、絶対の不道德なことだとも言い切れないであろう。だからこそ「鮮仁矣」なのであり、「無仁矣」ではないのである。

衛霊公篇の、

子曰、巧言亂徳、小不忍、則亂大謀。

については特別の解釈をまたない。

「巧言令色、鮮仁矣」の語句は、学而篇の前後の章句と考え合わせても、やはり、親子の関係について述べたものであり、子の親に対する態度について述べたものと考えられる。子の親に対しての理想の態度は「孝」を尽くすことである。「孝」の中には、多種の要素が含まれるが、孔子が、若年の弟子たちに示す言葉と考えれば、平易な内容にちがいない。この章句に続く数章を見れば明らかである。以上、述べてきたことを、総合して考えると以下のような解釈ができる。

「巧言」すなわち、うまい言葉やお世辞、また「令色」すなわち、媚びた表情は、決して真実ではなくて、作りものではある。従って「仁」、つまり真実の愛情とは言えない。しかし、子の側から見れば、「孝」というイデオロギーの中で、親を喜ばせようという気持ちで働けば、ある程度、意識的に言葉を選んでしまうであろうし、態度も作るであろう。親の側から見ても、たとえば、お世辞であっても、子が気遣ってくれるのは、嬉し

いに違いないし、まして、お世辞ではなくて、心からのものだと思えば、更に喜びは大きいに違いないのである。「巧言令色」は決して不道德なこととは言えない。親に対して不敬な態度をとる者に比べれば、はるかに良いことなのである。しかし、孔子は何故、これを恥じるのか。それは、相手を思う気持ち、十分でないと思えるからであろう。つまり、心から相手のことを思っていれば、「巧言」も「令色」も意識することなく、自然な態度が「仁」にかなうものになるはずだからなのである。心に真実からのものがあれば、いつでも「仁」のある言動、態度がとれているはずだからである。子が親を思つて「巧言令色」をするのは、悪いことではない。それどころか、親を思つてすることなのだから「孝」の一種と考えられる。しかし、まだ「仁」の出はじめにすぎない。これが「鮮」なのである。全体がまだ現れず、一部が顔をのぞかせた状態と考えれば良い。しかし、子が真実の「仁」を持てば、「巧言」も「令色」も意識せずに、自然に、最も相応しい言動、態度になるはずではなからうか。意識的に、親に対応しているうちは、まだまだなのだ。これが孔子の言いたいことなのではなからうか。

ここで「鮮」を「すくなし」と訓ずるのは、決してまちがいでない。問題なのは「すくなし」の内容なのである。「希」でも「寡」でもなく、まして「無」でもなくて「鮮」が使われていることを、深く考えなければならぬ。その上で、本来の意味に近づくことができると思える。

## 注

- (1) 論語 岩波書店 19頁  
 (2) 論語上 朝日新聞社 27頁  
 (3) 世界の名著 孔子・孟子 中央公論社 62頁



- (4) 論語 明治書院 17頁
- (5) 世界文学全集 五経・論語 435頁
- (6) 世界の名著 孔子・孟子 貝塚茂樹 中央公論社 59頁
- (7) 論語 貝塚茂樹 講談社 26頁
- (8) 謝氏曰、二者之可恥、有甚於穿窬也。左近明恥之。其所養可知矣。夫子自言丘亦恥之。論語正義
- (9) 論語 吉川幸次郎 朝日新聞社 160頁「恥」は卑屈な行為に対して、強い反撥をあらわす意とある。
- (10) 其の務めて外を飾りて、内に実無きは、聖人の深く嫉むところなり 論語古義 伊藤仁斎
- (11) 身體髮膚、受之父母、不敢毀傷孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝始於事親、中於事君、終於立身。 孝經 開宗明義章
- 有不孝者三事。謂阿意曲從、陷親不義、一不孝也。家貧親老、不爲祿仕、二不孝也。不娶無子、絕先祖祀、三不孝也。
- 禮記